かわ・まち・みどりが繋ぐ、地域に根差した学びと生活の結節点

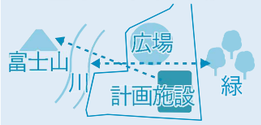
本施設整備によって、中井町の“かわ”と“みどり”をつなぐ軸線を中心に、比奈窪 56 エリア内外の空間と活動を縫合し、DX と連携させることで、町に点在する既存施設や自然環境での体験と、地域資源や教材などの情報が融合した、「地域に根差した学びと生活」のプラットフォームをつくります。これによって、町に点在する既存施設と豊かな自然をつなぐ回遊と活動を創出します。

テラスからかわみどりストリート、みんなの広場、富士山を見る

図書ゾーンから大階段を見る

中井町に寄り添う未来の公共建築・比奈窪 56 エリアを実現する建築設計の 6 つのポイント

2 つの軸線と重心となる広場



2 つの軸線とエリアの重心となる広場が、持続可能で強固な骨格をつくります

屋内外に広がる数珠繋ぎの多様な広場

多様な広場が集まり数珠状に繋がることで、エリア全体に賑わいをもたらします

フレキシブルな余白空間

拡張性の高いフレキシブルな余白空間がみんなの自由な使い方を支えます

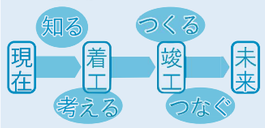
様々な環境に応答する大屋根

周辺に広がる風景に調和したおおらかな大屋根は屋内外の活動をつなぎます

DX による学びの集約と分散

DX を活用した集約による利便性の向上と分散による体験の拡充を両立させます

中井町民に寄り添う協働のプロセス



町民に寄り添う協働プロセスで、町民と共に成長する施設を実現します

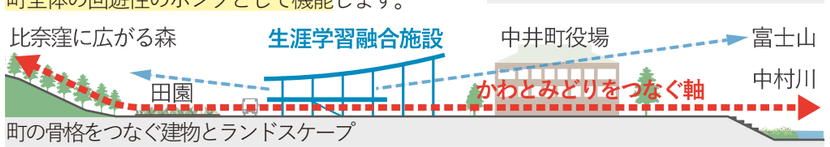
i．比奈窪 56 プランを踏まえた望ましい土地利用計画を建築設計としてどのように実現しますか

軸線・重心によるまちの骨格を中心に、建物内外の広場が連関することで、町の生活と生涯学習の中心となる比奈窪 56 エリアを実現します

学びを通じ、町全体の回遊性をつくる生涯学習融合施設

比奈窪 56 エリアは、水と緑の骨格軸に挟まれ、豊かな自然と田園に囲まれた場所に位置しています。そこで、本エリアを町に点在する既存施設と豊かな地域資源の結節点と捉え、学び・交流・防災・交通・観光が融合した町民活動のプラットフォームとして整備し、町全体の回遊性を創出します。川や森と富士山への眺望、周囲の田園風景、エリア内外の近隣施設を生涯学習融合施設とランドスケープによって繋ぐことで、書籍や資料の情報だけでなく、活動や体験と連携した「地域に根差した学び」を実現します。町民の学びと活動の拠点は、町全体の回遊性のポンプとして機能します。

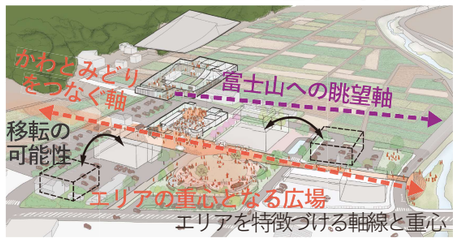
回遊性の中心となる比奈窪 56 エリア



町の骨格をつなぐ建物とランドスケープ

持続可能で強固なエリアの骨格をつくる 2 つの軸線とエリアの重心となる広場

周辺環境に応答した 2 つの軸線【かわとみどりをつなぐ軸】【富士山への眺望軸】と、エリアの重心となる【みんなの広場】が、新旧の施設を結びつける強固な骨格を形成し、将来的なエリア内における既存建物の建て替えやリノベーションを視野に入れた持続可能な整備を可能とします。



エリアを特徴づける軸線と重心

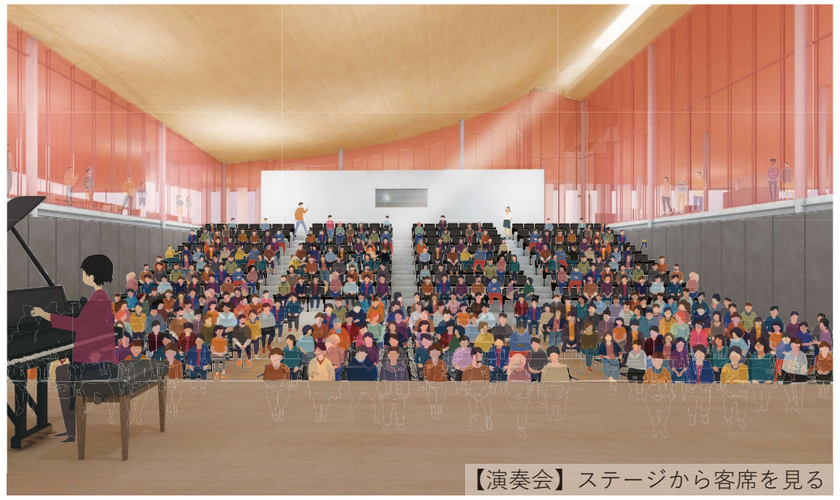
インクルーシブな場を創造する屋内外の多様な広場

様々な遊びや活動を集約した【みんなの広場】や【交通広場】、【大庇広場】などの多様な広場と建物内のホワイエや【みんなのホール】などの屋内空間を数珠繋ぎに計画することで、内外をつなぎ老若男女全ての人々に開かれたインクルーシブな場としてエリア全体を計画します。

エリアの重心となる【みんなの広場】

配置図兼 1 階平面図

【スポーツ】図書ゾーンからみんなのホール通して展示室を見る


【演奏会】ステージから客席を見る

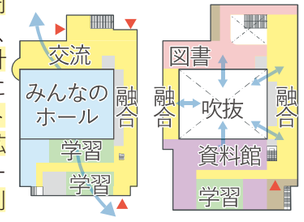
【マルシェ】みんなのホールからホワイエ、みんなの広場を見る

ii .2030 年を見据えた遠くない未来の公共建築を建築設計としてどのように実現しますか

大屋根でおおらかに町民の活動をつつみこむ広場のような建物とすることで、さまざまな過ごし方を許容する未来の公共空間を実現します

みんなのホールを中心に周囲を他機能が取り囲むゾーニング計画

1 階、2 階共に【みんなのホール】を中心に周囲を他機能が取り囲むゾーニング計画により、各機能の性能と人々の交流が同時に成立する計画を目指します。1 階東、2 階東西に可変性に富んだ融合ゾーンを配置することで、イベントに合わせた使い方の変更や将来的なゾーンの拡張等が可能な柔軟な計画とします。明快なゾーニングと柔軟なゾーン拡張が融合した町民が利用しやすい施設を目指します。

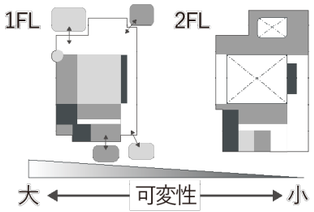


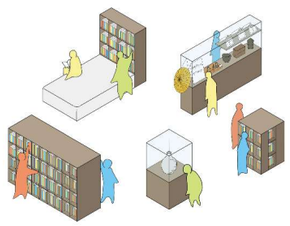
みんなの自由な使い方を受け入れるフレキシブルな余白空間

事務室やトイレなどを除く、ほとんどのゾーンを「フレキシブルな余白空間」として展開することで、用途を限定せずみんなの自由な使い方を受け入れる寛容な施設を目指します。「フレキシブルな余白空間」の可変性（自由度）の度合いは、主用途とのバランスを考えながら、設計段階で町民のみなさまと WS を通じて決定することを想定しています。

【山並みギャラリー】は、廊下を兼ねた幅 5m の閲覧スペースとして通常時は機能しますが、企画展示やイベントに合わせて、展示と図書ゾーンを拡張した展示・図書融合コーナーとして利用可能です。

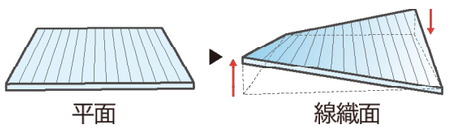
このような可変性の高い空間の集合によって、将来のニーズの変化にも柔軟に対応できる計画とします。

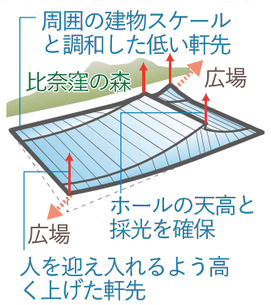



余白空間を彩る家具

周辺の風景や屋内外の活動を繋ぐ線織面を組み合わせた大屋根

直線が集合したシンプルな「線織面」を組合わせた大屋根が本施設をおおらかに一体化します。低く抑えた軒先と高く持ち上げた棟が生み出す抑揚のある屋根形状は、山々や住宅など周辺の風景に調和し、静と動の活動、個人・団体利用といった多様な活動を支え、交流を促します。

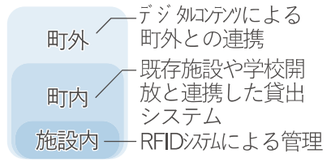




DX により、体験と情報が連携する学びの拠点

DX により、地域内に分散する豊かな自然や田畑での体験と、書籍や展示資料などの学びの情報を、学校や病院などの既存施設と連携して一元管理することで、世代や属性にとらわれない多様な学習スタイルに対応した生涯学習を支えます。

本施設内の書籍や資料は、空間の用途や周辺の眺望と関係するものを集約し、これに隣接して配置し、活動による体験と情報が連携した充実した学びを実現します。管理には RFID システム を活用し検索・追跡、貸出・返却、位置を管理し利便性向上と管理業務の効率化を図ります。

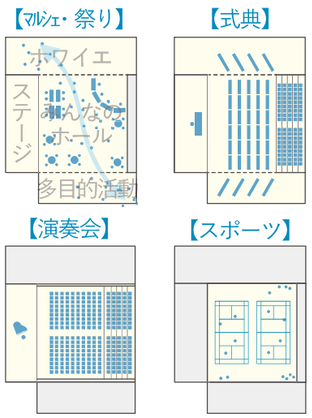


空間用途や眺望と連動した配架システム

空間	本の分類
ホール	⟷ スポーツ・音楽
ｱﾄﾘｴ・展示	⟷ アート
桜小道付近	⟷ 桜・春・植栽
カフェ	⟷ 料理・食文化

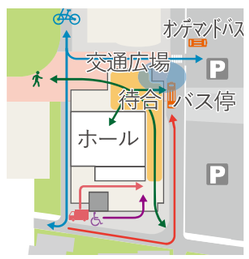
様々な使い方ができるみんなのホール

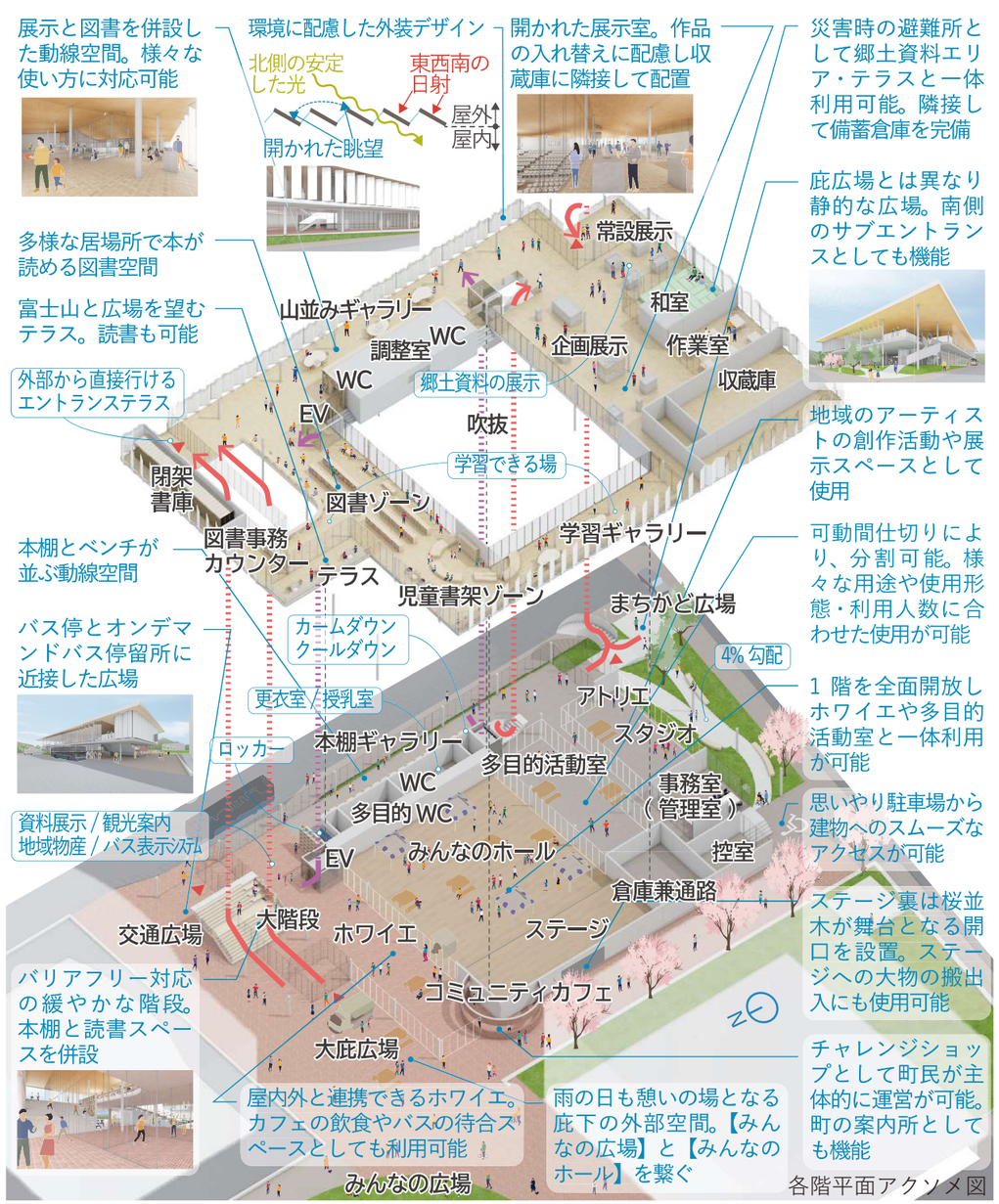
建物中央に配置した【みんなのホール】は普段は平土間タイプとしスポーツなどに利用でき、ロールバックチェアを展開することで演奏会などにも対応可能です。また、建具を開放することで南北の広場や多目的活動室などの内部空間と一体的に利用でき、マルシェや祭りなど幅広い用途に対応します。また、演奏会や演劇などの利用を想定し、1 階は可動間仕切り、2 階は二重ガラスを採用し遮音対策を図ると共に、全面に遮光カーテンを設置し、多様な演目に適応できる環境を整えます。PC 利用にも配慮し、ホール各所に電源を配置することで、イベントや講演会などの多用途に対応できる計画とします。



建物・地域全体の回遊性を高める動線計画

メインエントランスを北側、サブエントランスを南側に計画し、2 階への階段とエレベーターをそれぞれに併設することで建物周辺からのアクセスの利便性、建物全体の回遊性を高めます。また、北側入口に近接してバス停・オンデマンドバス停留所を配置することで、建物がバスの待合所として機能すると共に交通ハブとして地域内の回遊性を高めます。搬入用駐車場は事務室近くに配置し、管理者と利用者の動線を明確に分離します。





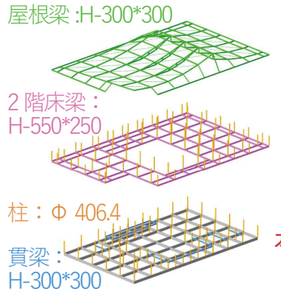
各階平面アクソメ図

iii．i と ii を実現するために中井町にどのように寄り添うことができますか

多様な専門性をもつチームで工期やコストを守り、WS 等を通じて町民の意見を柔軟に取り入れながら協働のプロセスでまちに寄り添います

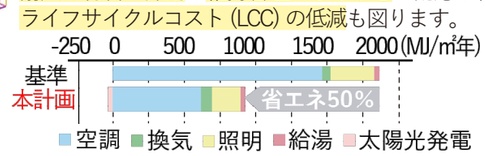
工期とコストを圧縮する構造計画

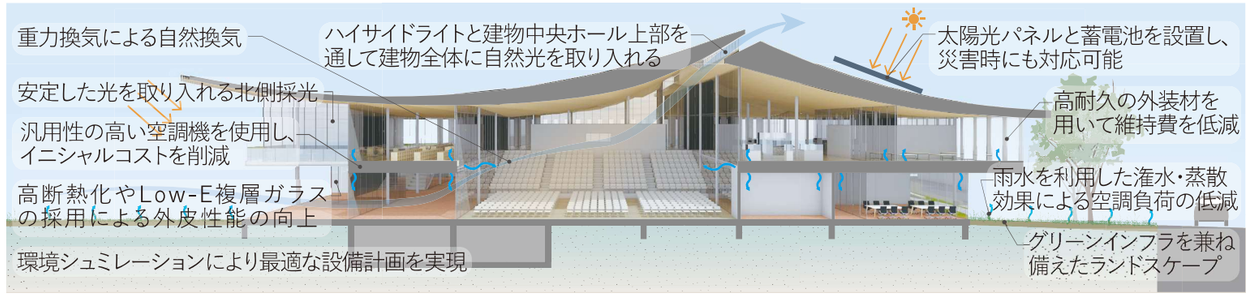
構造形式は、工期を短縮しコストを縮減するため、鉄骨造を採用します。7m × 7m の均等スパンにより経済性に配慮すると共に、純ラーメン架構により靭性の高い建物を実現します。地震力の大きい 1 階は、管柱と貫梁による耐震要素をバランスよく付加することで、剛性を高める計画とします。ダイナミックな大屋根は線織面で構成されており、直線部材である既製材の組み合わせにより施工が可能です。鉄骨造により軽量化を図ることで、基礎形式は布基礎とし基礎下は柱状改良とします。



ZEB Ready を実現し、LCC を低減する環境計画

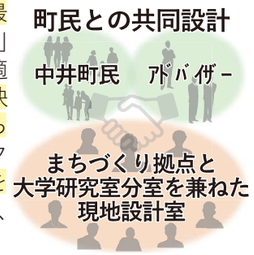
日射負荷の大きい東西面のガラス面積の削減、断熱性能の確保、高効率空調の採用に加え、自然エネルギー活用により ZEB Ready を目指します。高耐久の材料の採用や維持管理のしやすさに配慮し、ライフサイクルコスト（LCC）の低減も図ります。





まちに寄り添い、みんなでつくる協働のプロセス

私たちは、本施設を町民と共に創ることを最優先に考えています。「知る」「考える」「つくる」「つなぐ」の 4 種類の WS を各 2 回、計 8 回適切なタイミングで実施し、町民の意見を反映しながら計画を進めます。設計初期段階から中井町に現場設計室を設置し、設計スタッフが常駐することで、日常的な町との関わりを大切にすると共に、模型や CG を頻繁に公開し、町民に開かれた設計プロセスを実現します。



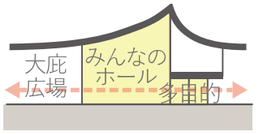
中井町に寄り添う工程とコスト管理

限られたコストと工程の中で質の高い施設を実現するために、多様な専門性を持つチームで取り組み、WS を通じて早期に仕様を固め、適切なタイミングでの概算算出でコスト管理を行い、それらを連動させることで、着実に工程に納めます。また、設備と空間の更新性によって維持管理コストを抑えます。

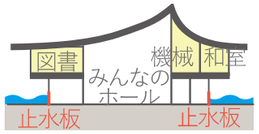
フェーズフリーな防災計画

日常利用の利便性と非常時利用の安全性の双方に柔軟に対応できる、災害に強い建物を目指します。浸水対策として、計画敷地を町役場敷地と同じ高さまで盛土し浸水高さを抑えた上で、止水板で建物内への浸水を防ぎます。避難所にも使える和室や設備機械室は 2 階に配置し、想定を超える浸水に備えると共に、早期復旧を可能にします。カフェは建物北側に配置し、みんなの広場と連携した炊き出し拠点として機能する計画とします。

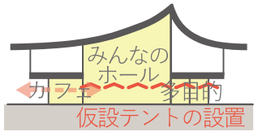
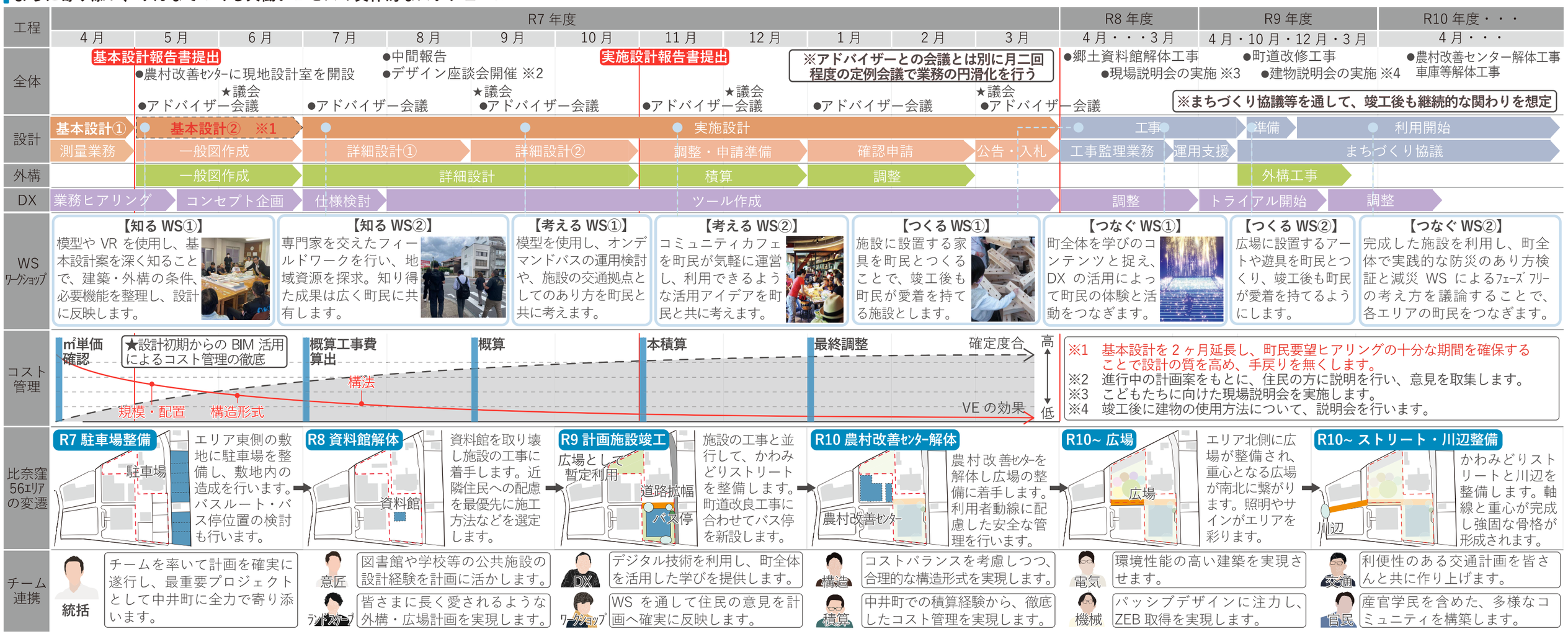
【日常利用】
日常の利便性を考慮した階構成。【大庇広場】と【みんなのホール】、多目的活動室が緩やかに繋がる。



【水害時】
約 50cm の想定浸水高に対し止水板で対策。早期復旧に配慮し、機械室や図書機能は 2 階に配置。



【震災時】
カフェを炊き出し拠点とし【みんなのホール】や外部広場と連携。仮設テントの設置も可能。



まちに寄り添い、みんなでつくる共働プロセスの具体的なスケジュール